

# 地域医療の実情考える

大分大学医学部地域医療学センターは、大分市内で「地域医療教育の在り方を考えるシンポジウム」を開いた。

同大学医学部は、地域医療の実情を認識・理解し、地域医療の面白さややりがいを経験させることを目的に、本年度から医学科6年生を対象とした地域医療実習を始めた。4月から7月にかけて6年生89人が2～3人に分かれ、2週間にわたって県内の地域の中核病院や診療所、

## 大分大医学部がシンポ

保健福祉施設などで研修した。

シンポジウムはこの実習を踏まえたもので、地域の医療機関などから約50人が出席。研修を受け入れた医療機関の副院長や担当者が医療現場だ

けでなく福祉や介護の現場を重視したカリキュラムを組んだことや今後の改善点などを発表した。実習前後に学生に

実施した地域医療に対する意識調査の比較もあり、「将来、地域（へき地）で医療を行ってみたいと思うか」との質問に対して、実習後は積極的な回答が増えたことが紹介された。

デイスカッションもあり、「地域で働くことの抵抗感をなくすように、地域医療の楽しさを教えられるのではな

いか」「学生たちは地域医療の必要性は理解してくれたが、いざ赴任するとなると地域の生活環境を考慮するだろう。行政も一体となって地域の良さを知ってもらうことが大切」といった意見があった。

同大学地域医療学センターの宮崎英士教授は「卒前の地域実習がそのまま卒後の地域での研修に移行することを期待している。研修医3～5年目で地域の医療機関で働くようになるとありがたい」と話した。

実習前後に意識調査 **積極的な回答が増加**

健康リサーチ